

私は現在付き合ってる彼女が大好きです。

ですが、その気持ちが普通の人とはまた違った方向に向いています。

裏の気持ちでは彼女が他人の欲望のはけ口になる事を望んでいる。

そして、表の気持ちで彼女を愛しているのです。

でも、私は彼女の幸せを願っています。

彼女は私の理想の女性だから。

彼女の事は何でも知っています。

趣味嗜好はもちろんの事、好きな食べ物から下着の色まで。

彼女の名前はゆかり、26歳 161 c m 53キロ

お尻が大きい安産体系バストサイズはEカップ 少しぽっちゃり体形 お尻の大きさにコンプレックスがあり、

お尻を見られる事を恥ずかしがる。

彼女は性に対して興味が強く、AVや漫画を見て慰めていたらしい。

私はフリーランスで仕事をして、彼女は会社に勤務している。

見た目もさる事ながら性格にも好感を持てたのだ。

そんな彼女と久々にお疲れ様でした会を2人で開こうと決めました。

待ち合わせをして予約をした居酒屋に向かう。

ゆかり「今日はめっちゃ飲んじゃおうっと！！」

私「ほどほどにしといたほうがいいんじゃない。（笑）」

ゆかり「大丈夫！！明日休みだし、それに久しぶりじゃん！楽しみにしてたんだから！」

彼女は仕事終わりに来たので、タイトなスーツ姿。

これがまた非常にそそりますね。

ゆかりさんとは何度もやってるけど、いつ見ても飽きない美しさです。

居酒屋に入り、飲み放題の時間制で個室に入る。

飲み物とおつまみを注文して乾杯をする。

ゆかり「かんぱーい！！」

ゴクッゴクッゴクッ・・・ビールを飲み干す彼女。

相変わらず豪快だ。

ゆかり「うまいっ！」

私「飲みすぎないようにしないとダメだよ。」

色々なお酒を飲みながら、会話を楽しむ。

私はお酒は程々に、ジンジャーエール等を飲んでるので酔いは回らない。

気が付いたらゆかりは結構酔っぱらっている。

顔もほんのりと赤く染まり、目つきもトロンとしている。

ゆかり「トイレ行ってくる～」

そう言って立ち上がり、フラフラしながら部屋を出て行く。

そしてしばらくして戻って来た時だった。

私「あれ？ストッキングどうしたの？」

彼女は生足でストッキングを履いていなかった。

ゆかり「えへへ～脱いできちゃった♪だって邪魔なんだもん！」

ブラウスも少しボタンが外れていて、胸元が見えている。

スカート丈も短いせいかパンツがチラリと見える。

私は彼女の太腿を撫でまわす。

ゆかり「やんっ□◻すげーな□！」

私「こんな格好だと襲われたら危ないよ。」

ゆかり「平気だってばあ、もう心配性なんだからっ！」

ゆかりは私の手を取り自分の胸に持っていき、私に触らせる。

私「ブラも外してきてるんでしょ？おっぱい見えてるよ？」

ゆかり「うん・・・そうだよお」

私は彼女の言葉に興奮してしまい、股間を大きくしてしまう。

そんな最中でも私はこんな彼女が他人に触られているところを想像する。

私「戻ってくるとき男達に声を掛けられなかったか？」

ゆかり「掛けられるわけないじゃーん」

私「もし声かけられたらどうするつもりだ？」

ゆかり「そのまま一緒にトイレに出戻りしちゃうだけ♪」

私「戻ってなにするんだよw」

ゆかり「もちろんセックスだよっ！決まってんじゃん♪」

私「彼氏の俺の前で堂々と宣言するとは。w」

ゆかり「でも、たかやってそういうの好きじゃん！！w」

私「まあ、そういうプレイは嫌いじゃないけど、浮気は嫌だよw」

私は否定しなかった。むしろ大好きだ。

彼女は私の欲望を理解してくれていた。

そんな話をしながらお酒を飲んでいると、そろそろ飲み放題の時間も終わりを迎える。

私は店員を呼び会計を済ませる。

その後、二人で歩いて帰る途中にあるネットカフェに入るかゆかりと相談していた。

ゆかり「あー久々に行く！？アイスも食べられるし、スープも美味しいよね！」

私「行こうか！」

24時間営業なので深夜遅くまで利用できるのだ。

私達は3時間パックで入店し、受付を済ませて個室に入った。

私「ドリンクとかアイス持って来るね。何飲む？」

ゆかり「メロンソーダとバニラアイスとコーンスープ！」

私「そんないけるの？wちょっと待っててね。」

私は機械でドリンク等を注いで、トレイに乗せて戻る。

各個室前に置いてある靴を見ると、店内はほとんどが男性1人で利用してる感じがした。

私は個室に戻りドアを開ける。

ゆかり「ありがとうー！」

私「なんか眠そうだけど大丈夫？」

ゆかり「うん、大丈夫だよ。勝手に寝るからw」

たしかに、彼女は仕事終わりに来てるから疲れてるのは当たり前だろう。

私はパソコンを起動させて、適当に映画やアニメを見る。

ゆかりはうつ伏せになり漫画を見ている。

私はふざけて彼女のスカートをたくし上げた。

ゆかりの白く柔らかいお尻が露わになる。

ゆかり「ねーちょっとーw」

さらに白いパンツをお尻に思いっきり食い込ませる。

ゆかり「きゃあっ！ちょっとw」

私「すげー良い尻wてかこんなんだったら脱いじゃえよ」

私はそう言って彼女のパンツ脱がせる。

ゆかり「もうっ！」

私「丸見えじゃん。エロw」

スカートは腰まで上げたまま、うつ伏せでデカイ尻がまるまる出された状態だ。

普段からこういうスキンシップをしてる為、そのままスルーしてお互いのやりたい事を続ける。

私はそのままの状態でたまにお尻を触りながらパソコンでゲームや動画を見る。

彼女は相変わらずうつ伏せのまま、お尻は丸出して本を読んでいた。

時間は過ぎていき、私はトイレに行きたくなった。

私「ちょっとトイレ行ってくるよ。」

ゆかり「行ってらっしゃーい」

部屋を出てトイレに向かうとき私はとても凄い事を考えた。

部屋を出た時彼女の下半身はまる見え、もしトビラを開けた時に人がいたらどうなるのか・・・

間違いなく他人は私の彼女のエロい尻を凝視するに違いない。

尻だけならまだしも、私は彼女のスカートを上げて、パンツも脱がせてしまった。

そして彼女はうつ伏せて足を伸ばして、若干開き気味だ。

その状態は彼女の恥ずかしい部分が丸見えなのだ。